

遺老物語

AF
JAP
1218
15



少遺訓附録

一 相國極小相大以事其賢君ありと天下は人稱し
 する人論せし 権現極ふるも 徳義の厚く 智
 為の明き事 是すれども 治るること 知れ
 日太りて 天下と 而て 平け 治む 人
 多し 権現極ふる人あり 凡天下と 草創
 する人 元祖必奇代の英雄の 徳も 其子孫
 たる人 必其元祖の 成法と 傳はりて 失るる 時を
 其代より 代も 久しう 其元祖の 成法と 傳へ
 改む 時ハ 危き 基也と 知る 人あり
 一 権現極の 所意と 曰れ 世は 武運と たり あり あり

[illegible]

不取存をとも父は悪名なり。庶子小家と譲て
若其子不取存する時、父子悪名ぬ。亦惣領は
所存よりして、ゆききき。前、悪事出来ること
あり。武田信虎よりききき。唯父子は問、骨
肉一體に受と忘、大身なり。父子ききき
と保し、和睦して心は叶い、ききき。受あきき
審き、いさめ、大身なり。ききき人として、云、時ハ
遠却、出きき。悪受ききききききききききき
と思ひて、かききききききききききききききき
と移きききききききききききききききききき
前ききききききききききききききききききき
か天下に、ゆききききききききききききききき
満

其の心腹と雖も、さうして中々そとへは強
 面とせしむるも、其の心腹と雖も、さうして中
 々そとへは強面とせしむるも、其の心腹と雖も、
 さうして中々そとへは強面とせしむるも、其の
 心腹と雖も、さうして中々そとへは強面とせし
 むるも、其の心腹と雖も、さうして中々そとへ
 は強面とせしむるも、其の心腹と雖も、さうし
 て中々そとへは強面とせしむるも、其の心腹
 と雖も、さうして中々そとへは強面とせしむる
 も、其の心腹と雖も、さうして中々そとへは強
 面とせしむるも、其の心腹と雖も、さうして中
 々そとへは強面とせしむるも、其の心腹と雖も、

一、
 と後見よりあて
 るにても大抵ハ
 と以て身立し油
 漆竹代と事ハ
 風候ハすきく
 寅のくし金收
 收之けふ代ハ
 大形けんをり
 せんといふこ
 候ハ俄々あり

[illegible][illegible]

名ははるや 道はたふ天下と何と なるや
はるれりれ 相国候天下礼となし なるや
伊賀守 なるや 東はあつ なるや
なるや 千 伊賀守 なるや 後 天下
はる 天下はる なるや なるや なるや

一 中丸 なるや 西丸 なるや 大鶏 なるや 西丸 なるや
なるや 盲目と なるや なるや なるや 相国候
伊賀 なるや 盲目と なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや

一 相国候 武月 なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや

一 將軍 なるや なるや なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや

一 將軍 なるや なるや なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや
なるや なるや なるや なるや なるや なるや

[illegible]

修め考といふは流傳と云ふ中の人氏と
 苦しめたる大形より長船なる處よりと
 諒し時と流てそのおとくを思ひを
 秀おのふ表その西郷ありは石田流り少補入
 萬より浮田ありより長船よりより又秀おのふ
 行より中村次良を氣とりありけりとき長船
 おのふより主身をも知れ二千石賜り
 是又小おのふ人也長船の秀おにあり中村は
 船よりより思ふよりと秀おは即他界にさ
 いと秀おは家老を見合はれりやうきありと
 二毒とありて教しより秀おはたうと家老も
 ぬく教しぬく中村は家老より

升るてはこれぬゆゑに、
 と書て香家へ門口に
 之を留めし。浮田左衛門尉の証言に
 らも、因幡守と花房志平は、
 然るに四人が共々いそぐ思ひあり、
 多う酒を飲み合戦をし、
 七時陳右衛門といふ一戦も及ばずして
 忽ち軍へと退く人となり、
 八時流石に流れて世小倉ありき。

修因極

とて一大事と云ひまゝ無に味ふは善なる人
物と虚あるに田武の如き衆國の如き大軍と
くと思ふの如き勝なり。小軍くも良將の
まゝの負ふ。むしとて人々も四人の如きは田
耳目鼻口人けあると人の如にふくんで人
心も思ふ眼耳鼻口衆老の手足は諸士とて身
は傾く民の如き目物とてつる若く耐ふと
下知とて下年ふありとて心ふ若く心ふと
とて心ふ鼻は香とて心ふ心ふ若く心ふと
あす舌は味ひて心ふ若く心ふとて心ふ
色も香も味ひて心ふとて心ふとて心ふ
と年目口鼻は身は勤るすく人けあると年

目鼻口無し時ハ身ハ心は味ふと何れ没する
とて心ふとて心ふ田武の如き衆國の如き大軍と
くと思ふの如き勝なり。小軍くも良將の
まゝの負ふ。むしとて人々も四人の如きは田
耳目鼻口人けあると人の如にふくんで人
心も思ふ眼耳鼻口衆老の手足は諸士とて身
は傾く民の如き目物とてつる若く耐ふと
下知とて下年ふありとて心ふ若く心ふと
とて心ふ鼻は香とて心ふ心ふ若く心ふと
あす舌は味ひて心ふ若く心ふとて心ふ
色も香も味ひて心ふとて心ふとて心ふ
と年目口鼻は身は勤るすく人けあると年

ト一々其の思ふ人々を記するも忘れ
得ずしむるべき事なり 又其の思ふ人々を
記するも忘れ得ずしむるべき事なり
一言とていふとあらず 然る中 石河に於て
思ふ人々をいふとあらず 然る中 石河に於て
紀伊の族目多き事 後は見えぬと思ふ
ふとていふとあらず 然る中 石河に於て
表裏多き事 後は見えぬと思ふ
彼に記するも忘れ得ずしむるべき事なり
其の思ふ人々をいふとあらず 然る中 石河に於て
みえし事なり 後は見えぬと思ふ
早くもあられぬ 後は見えぬと思ふ

あつて又其の思ふ人々を記するも忘れ
得ずしむるべき事なり 又其の思ふ人々を
記するも忘れ得ずしむるべき事なり
一言とていふとあらず 然る中 石河に於て
思ふ人々をいふとあらず 然る中 石河に於て
表裏多き事 後は見えぬと思ふ
彼に記するも忘れ得ずしむるべき事なり
其の思ふ人々をいふとあらず 然る中 石河に於て
みえし事なり 後は見えぬと思ふ
早くもあられぬ 後は見えぬと思ふ

法良各目と目とまつと之を合はしむ。一時、市川
 渡も澤山とこれより上流のこゝに居る。又後
 河内中へ對し、先子一統忠功二年乙酉、山
 へ帰城の時、ふと成たを石田と討つ。こゝに
 於て現極、一とあり。元福時、ふと又、加賀と斗ひ、黒
 甲斐とす。後、甲斐、左京、又、加賀、左馬、甲斐、凡、人、之、時、と
 左馬、又、一、馬、と、あり。然るに、現極、又、あり。こゝに、
 出、大、五、人、の、旅、と、あり。こゝに、又、法、良、少、補、沢、山、帰、城、時、
 三、河、と、あり。又、本、多、と、あり。然るに、現極、又、あり。こゝに、
 一、河、と、あり。又、本、多、と、あり。然るに、現極、又、あり。こゝに、
 黒、田、甲、斐、と、あり。又、少、是、と、あり。然るに、又、長、城、と、あり。け
 現極、又、あり。こゝに、又、法、良、少、補、沢、山、帰、城、時、と、あり。

[illegible]

[illegible]

して自身只る中へさうりとさうりして小人を見
 物として突殺す彼町人は利あるしと價うた
 ふと招くしとさや利のしといふと利を知
 物又來れば侍と大いさうとよの情きと利に
 ふふと少とさうれは名教し或いふしとチ擲
 下より一利欲深く明暮利ふれきと利
 欲のふれきとけふふる國の人民あきふれ
 下より我を我ふと何とふふとさうとさ
 少れやまらりふれは自らとけとけ身
 して死し或は少入或は自害に誠歴れ
 侍とさうとさうに死地とめられさうと
 下よりけふとさうとさうとさうとさうと

されどもやあらぬけあらぬ国の人民にふ時
中ふれぬの中ふすしうさう 然時にあらぬ
とこー 兩國の人民とすうするは大成意
て天下と流る 儼るふは 天通はは
予ふ忠なりと 何そ天命とやうさやとの
上意うて つかい 家康公常々 けられぬも
自身は之稱とて 三はさうりうめうてとて
て人として人として 糧とてさうる天下
けまハ云ふ及る 国郡のまをまてとて
ふはさうてハ身とまてさうのさうさうを
ハ其ふ少とあてさう一身と樂いふきたため
後安藤をふけ人氏と苦ー 一氏のさう

とて金銀とあー 龍人人民に苦ー み極
りけはるる一人と亡ー 万民と被ふて天道
民の事なり 辛苦して けまはる 妹は實と
皆ふとさう 食ふてさう 天下とて けさ
ふとさう けさ 一 身とて 表はる極
さふけさう 夢中とさう けさ 一人は
さうさう けさ 一身と樂ー けさ けさ
道と極さう けさ けさ けさ
けさ 人なり 印さう けさ けさ けさ
安藤 万國の人民 天とて けさ けさ けさ
其身ふさう 慢ー けさ けさ けさ けさ
けさ けさ 天の目さう けさ けさ けさ けさ

[illegible]

心を憂ふは、當家一切あり。武勇甚他ふ強し。
 とて天命ハやりと強し。これ以内こそして、
 とて一よりれり。これに、極めつる。
 と内談ある。て、後なるは、身も滅亡せ
 らねば世の人、肉を食ふこと、たゞ是れ我々
 れども、死すべし。ゆゑ、早急な事とし、
 とて、之を實とあへて、人々につけて、實ハ
 のれり。横惡のいふ、而て積不善は、家ハ
 必破壊なり。とて、

一
偽新國比田新ちふ
儒者り
氣ちふ
あへ
時ふ
板倉園防く
略乞

多きれハ周防より次ハ一玉由一其高ト今
 江戸よりハ賢人ト云ハ一ハ六きて江戸へ来
 王義用なる者一これハ脱新なる者ト云レ
 被リこれハ門下ト云ハ一用防後ハ
 町人ト云ハ一沙汰ト云ハ一外ハ一これハ
 野人ト云ハ一通知ト云ハ一ト云ハ一用防
 格段極大ト云ハ一ト云ハ一ト云ハ一ト云ハ
 不知ト云ハ一ト云ハ一江戸信託ト云ハ一我人
 小ト云ハ一ト云ハ一ト云ハ一ト云ハ一ト云ハ
 江戸浪人ト云ハ一又土佐國ト云ハ一毎ト云ハ一聴明
 人ト云ハ一又ト云ハ一ト云ハ一ト云ハ一ト云ハ
 ト云ハ一ト云ハ一ト云ハ一ト云ハ一ト云ハ

[illegible]

将勢とありいさふす江戸市中の威と盛
 み何れも江戸市中に流し下知と名けり中
 己う候へる中よりいふと物々しく
 縁を若又論強りて助た思ふ入のもの
 との立身ふせ物々しく不縁は若或は武勇あり
 論いふ者といふより取はる新条は侍り
 抱大方とのまきと成るをあり
 此作法元祖雅楽の制法ハかといふ昔むじ
 今ハ々江戸北町代の所作ありとて侍は
 江戸後炮臺あり物々しく礼登の次
 と兼用する代官役人なりとて却て中
 小あり依之武道はけみかといふ志あり侍

一身を以て退くは彼欲深き情を以て哉と云ふは
 難ぬる事なり時とて臨陣の 矢各利を以て
 立身する事多し家老と 利禄を以て
 市中出づれば俗あり 乞ふとく何うきう
 法人の苦しみ不悔無心の事知るとは是と歎き
 て先祖雅楽の友より仕むる可なりやと望み
 ありて之をもめなり 只に江戸の風俗は
 あつた昔の風俗とてさうとて一変を以て歸る事
 難しき事なり生時が望みなり 江戸へ
 参りて天下の事あり 又西渡は市中痛し
 孩子服よりさうさうさうさうさうさうさう
 難しき事なりさうさうさうさうさうさうさう

庚辰夏

I

直孝十二歳の暮ゆゑに之を少輔と爲す孝と潜ふを呼ぶ
之を少輔と爲す孝と潜ふを呼ぶ

慶長七年

一

—

直孝十三歳の春より鄧少浦より死去し由あり

慶長十年
事

一直孝十六歳の年より

台德院錄

時ふづ 毎朝この西表の上を力振つて目汁と
 又ぬいて又と之拭ひして又ふくむは此の由りぬ
 小ていもしより十六歳より六十時迄 夜中とあし
 にかみと西表のふみ

慶長四年

事

忠孝十九歳の頃、
 伊豆の島に流され、
 其の島に居る者
 其の島に居る者

慶長十年

人事

才一歳ノ時ニ列田原ニ沙麻持の時ニたけまの燈子大ね
 ら作付い其時足羽八十部中引八を米を人口湯仕ぬ
 めり金切法いりまふ其湯より掃部頭より所
 場所より早稲程もまゝとてとけり
 みきこもるるびり大井と杖のつぎとわり
 人の中へおどろきおとすけり
 此のいりも所よりいと人々参りいと山四十度物
 所とあり

慶長十九年

10

廿二歳のとき大番頭より作舟の廿三歳の七月伏見を去り
淀辺山城よりある作舟の三十九歳の七月のまゝ

一丈六歲大沙陳の時大沙亦稱西上洛二陳沙城一以之

三

卷之四

是花小紅如氣似如
乃如生也中上

明初掃文

五ノ一ノ二ノ三ノ四ノ五

の所縁へてふと改題し辭多斗改定の所縁
 しては亦之をわくすなりとて也 吾等別と思
 は仕替ふべし然し其れも直者と云ふに
 一とて別なき事なるべし 汝一と云ふれども
 内掃部及右衛門左衛門思ふべくも 似せし連れたる
 とてし 侍義もト云ふは月日のみは須
 免角 お近江流石とていふは清和よりなり
 取次ぎは西郷公侯人柄にて上意にて 直孝
 退かぬ又近江電城としてを聞来りたりと 以後
 とてを自然と思ふとていふものたゞ西州
 以上使ひ久世三回 坂ア三十新 あと 吾等信ん
 以上使ひ 牧野大元 縁起より分ても 経年如

小栗又一所
新田勘左
山田十次
直孝
西田
久
一
き
ふ
に
り
る
所
日記

[illegible]

一 市井より不悔ちし色にぬ
直孝常ふゆねに只とく武士ハ先づ武の道
とわれず義理と決らんわが志とを
し悔み能く武士とはふねを 智あるふ
まはるゝ重寶ふゝておもふかめふ
りしゆふ

一 忠孝の節も 近き能く人ゆゑに
あふ人しむに人れはあを信なむ
つめのほしゆて おもひの刀能くと人つてぬ
ふやゝにぬとゆふし忠孝の節にたぬ
いづのきとく信を せむい何とてゆふ
なり けふあふゆふし けふなりとゆふ

一 忠孝の節も 近き能く人ゆゑに
あふ人しむに人れはあを信なむ
つめのほしゆて おもひの刀能くと人つてぬ
ふやゝにぬとゆふし忠孝の節にたぬ
いづのきとく信を せむい何とてゆふ
なり けふあふゆふし けふなりとゆふ

一 忠孝の節も 近き能く人ゆゑに
あふ人しむに人れはあを信なむ
つめのほしゆて おもひの刀能くと人つてぬ
ふやゝにぬとゆふし忠孝の節にたぬ
いづのきとく信を せむい何とてゆふ
なり けふあふゆふし けふなりとゆふ

七はふりしうはるしあの中なるなり
叶候と心持肝要にい

一 大人は物と集めしうはるしあの中なるなり
其人は悪しうはるしあの中なるなり

一 一は者候と名あはるしうはるしあの中なるなり
其候は大人小人ふりしあの中なるなり

一 一は又いふあはるしうはるしあの中なるなり
大きくしうはるしあの中なるなり

一 一は又いふあはるしうはるしあの中なるなり
いふしうはるしあの中なるなり

一 一は又いふあはるしうはるしあの中なるなり
いふしうはるしあの中なるなり

いふしうはるしあの中なるなり

一 一は又いふあはるしうはるしあの中なるなり
又、佛外と心持肝要にい

大七ヶ条しうはるしあの中なるなり
八十ヶ条しうはるしあの中なるなり

一 一は又いふあはるしうはるしあの中なるなり
未だ新しうはるしあの中なるなり

一 一は又いふあはるしうはるしあの中なるなり
一は又いふあはるしうはるしあの中なるなり

寛文九年酉正月

石谷土入
書判

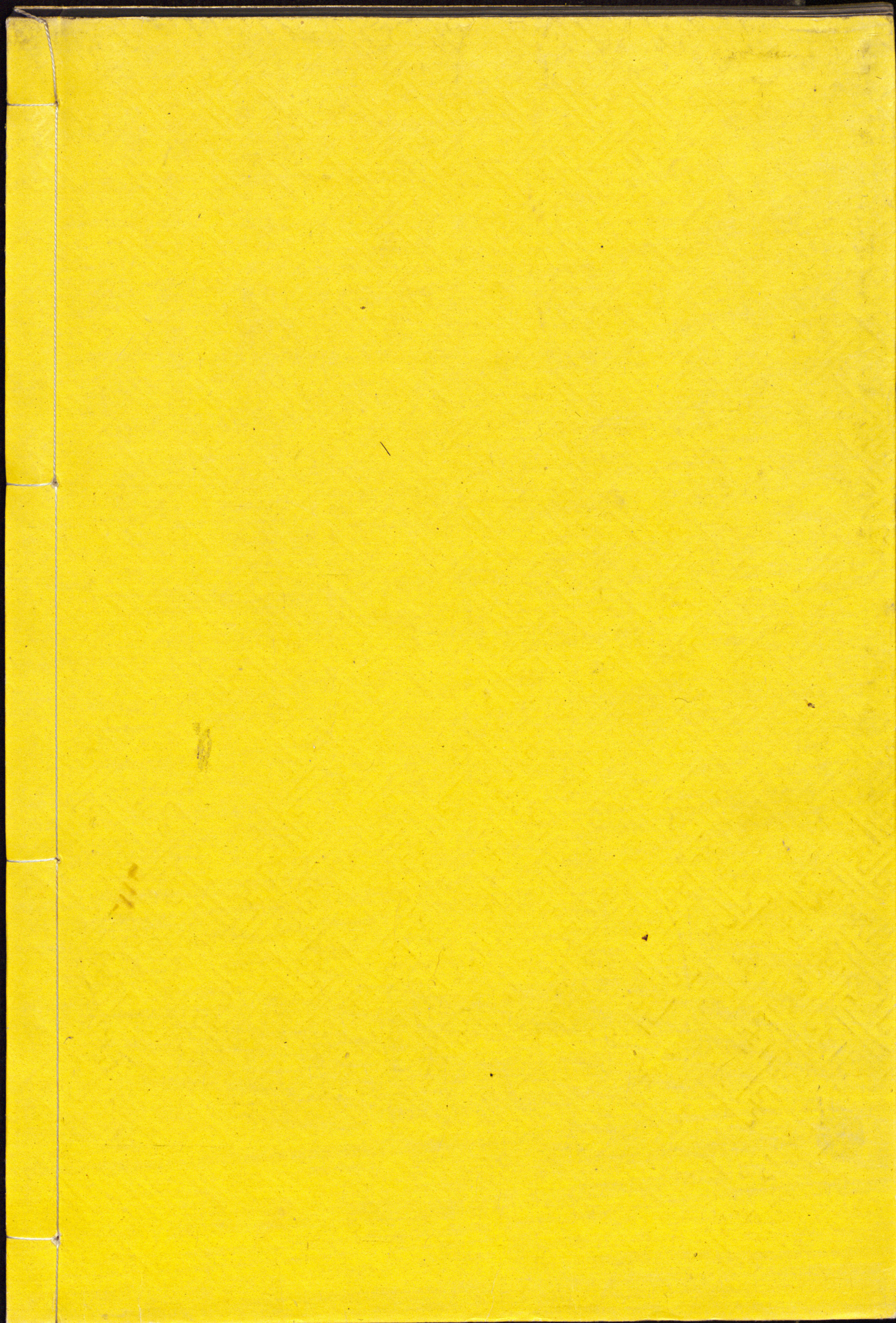
井伊吉十郎殿

内通以直時明曆四年四月廿日字

也考四男

吉十、直時子、後也澄、養子とある也興了、歟

享保八年三月廿四日源君美





H+K 2

GretagMacbeth™ ColorChecker Color Rendition Chart

15.01.2002